



新公集

卷七

(長谷部製本)

昭和十三年七月十六日印刷
昭和十三年七月二十日發行

新萬葉集 第七卷

編纂代表者 山本三生

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座東京八四〇二番

電話芝(43)自一一二四番

目次

——作者別氏名五十音順——

ひ	の部		三
ふ	の部		七
へ	の部		一六
ほ	の部		一七一
ま	の部		二九
作者略歴			三七五

- 装幀 横山 大観
- 題簽 比田井 天來

第七卷

日 江 井 咲 子

くれてゆく窓に見てゐし楮原しもとばらとほき家には灯がつきにける
吉野川の山かげにして夕日てるけはしき崖に咲く合あ歡むの花

白馬岳にのぼる

深き霧わづかに切れし谷向う赤岩山に日あたれる見ゆ
深き谷を吹き上り來て音たつる霧は流れぬ這松の上を
忽ちに深き霧より日のいでて目下遠く雪溪に照れり
岩あらはなる尾根吹きすぐる霧はげし地につきて咲くウルツプ草の花

日 置 廣 雄

不遇のうちに祖父を逝かしむ 一首

わびむとてわびも得ことざりき息こときれしみまへにぞただひれふし泣かゆ

東京株式取引所市場

すがやかに朝をうるほふからたちの青垣ぞひに坂下りにけり
つぎつぎに庭樹の椎に飛びきたりこがらめ今日も夕こもるらし
日影みつる

大引あとの市場はほの昏し散らばれる紙の白さの目にさえにつつ
人去にし市場はひつそりと暮れちかし床に敷かれし油のにほひ

日 岐安貴夫

湧き水の流るる中に大芹の濃き緑葉はゆれ動きつつ

日 暮 衛

喇嘛僧の赤き衣のよごれより春の香しるき南風となりぬ

日 高三郎

をどり立つ簾の眞膚は八重潮のさ走る海に光りつつ見ゆ（黃海にこ）
しらしらと粉雪は青くたそが黃昏れぬ炭をおこして獨り飯を食ふ

梅雨あけの雷いかづちなりて巢ごもれる鷄とりは靜かに翼ふるひぬ

日 高 一 雄

紅蔦のとぼしく這へる道の邊の石はわづかにぬくみもちたり（京城郊外洗劍亭）
吹き晴れて風は高きにうつりたり澄みきはまれる月のするどさ

日 高 章

夏向ふ野面のみどり闌けにけりさやかに朝の靄は霽れつつ

上簇を了へたる宵の安けさや食後をひびく法師蟬のこゑ

あがり蠶この營みかなし糸吐きてねもごろに自おのが身はつつむなり

夕まけし段だら畑に陸稻やつかひ積む人かけ見えて遠き刷毛雲

山村のみ冬のくらし静かなりかしここにここに蕤織る音

霜なぎのぬくき日向や粃を干し野良着つくろひてこの里のひと

日 高 爲 也

奄美大島の一孤島に山仕事に行きて

はるかなる海をおほひし雨雲の夕は島の雨となりけり

はねながら太き丸太は轉び來て岩崖の下の土をひびかす

のぼりゆく牛の歩みのろさにも氣はいらだたず朝の山路

どつしりと太き丸太をかつぎ居れば新しき今日の力湧き來る

鞍取れば今日のいとなみに疲れたる牛は靜に草喰みに行く

日 根 守

うら若きいのち終りしをみなごの死亡の届をけさも見るなり（戸籍課在勤の頃）

日根野青鳥

火田

遠山のみねの高きまでひらかれし火田（火田）のくぎりしろく雪あり
溪に入りてにはかにさむし目の上の山の火田にとけぬ雪みつ

水標町（京號）

街燈のまばらにつづく鐵路横丁水標橋（水標橋）にきてつよき夜の風

金剛山の金梯の峻岨をのぼる

ひと溪をうづめつくせる山崩えの岩むらさむし水の音する

京城貞洞坂にて

かさざぎは吾がまへに下りて歩むなりなだら坂道夕陽のさむき

碩儒李栗谷先生の遺跡花石亭を訪ね朝鮮佛法僧のなくをきく

花すぎし栗一面のこもり山ひる日ざかりに佛法僧のなく

日 野 光 一

病 中 詠

心しづかに今は死にたきとたらちねの母に言ひ捨て胸迫り來ぬ
病める身にかかはりもなき一日が靜かに終りしづかに來る
明日を恃む心なけれどかにかくにけふ事もなき一日が終る
いま一度快くなりたけれ健かになりて見る世は新たなるべし

白内障にて左眼を失ひ、右眼また著しく視力を失ひたるに

我が歌のここの頁にのり居りと聞けどもよめずわが盲ひたり
しかすがにおのれ自ら死にがたし死にゆく命いよよ哀しく

日 野 靜 樹

久方の天の眞澄のただなかにいや高きかも雪山の秀は

日 比 修 平

戸をとざし娘等いねしかど蛾は土にいまはの際の分泌せりけり
なめくぢはまだ棲まねどもとろとろと日がけぶる野は痒くてならぬ
ぬすびとの晝をきたりて荷をひらく野では蟲らがつぎつぎ死にゆき
夜をひかる蟲水中に無數ゆゑ下駄や位牌がうちよせられぬ
猫族が貝がらを嚙むおとかなし干潟のそらに菌糸萌えつつ
勞咳を病むことなれば霧の夜は葦がひかるを見しと云ふかや

日 比 野 道 男

紀伊湯崎に病を養ふ

はろばろと海に落ちゆく日を見れば明日さへとほく思ほゆるなり

路上所見

道ばたの小松の傍に童^{わらは}寄り背くらべをして行きにけるかな

暴風の日に和歌の浦にて

風をいたみきほひて寄する高浪に遠淺の海は濁りたるかも

病中詠

溜め置きし壘^{いぼ}の尿^{いば}の始末さへ人にまかせて衰へにけり

久しかりし病も一たび小康を得て、自ら階下の厠に赴く

朝ながらこほろぎ鳴けり床下の土の濕りをつぶさにおもふ

病再び重り入院手術を受く

窓際に髪を梳^すきゐる看護婦^{みどりめ}のけはひに覺めてまた眠りたり（翌朝）

屋根の上に降りゆく聞けば今日すでに時雨となれる雨の音かも

窓の外の木々はおほかた落葉して澄める日射しに來る鳥おほし（休日の病院）
床の上に永く臥^ふつきて明け暮れのけぢめもわれにかかはりはなし（師走）

退院後はじめて散策す 一首

うららかな冬日の町を歩み來てたのしきほどは勞れけるかな
わが庭に射す日の光のどけくて小草^{せうさ}はな咲く野を想はしむ
春ふけて庭の八つ手葉つぎつぎに伸びいそぐなり兄葉弟葉
のびきりし八つ手兄葉はおのづから力を讓るその弟葉に

晝たけてけふ咲く花の夕顔の蕾の反りに力こもりぬ

黒潮の流れも今日は沖に寄りて大渡津海は風ぎ極れり（熊野）

海とほくわれは來しと思ふ日毎日ごと雲疾く飛ぶ嶋山の上（肥前平戸嶋）

おほほしく鶴見ヶ嶽に雲卷きて北九州は雨となりにけり（別府）

いち早く漆樹^{うるし}もみでて足引の山の上より秋は來にけり（高野山）

鳴門

中之瀬をきほひて落つる疾潮の白々として沖に及べり

この見ゆる汐瀬の果に浪うちて阿波の沖べは今日東南風^{みなみかぜ}なり

昭和九年九月二十一日朝未曾有の颱風關西を荒しわが家は
高潮にさへ襲はる

命ありて再びわれは降り立ちたり潮退^ひきたる直土^{ひたつち}の上に

紀伊道成寺にて縁起繪巻を見、傳説の安珍清姫を

今にして思へばとほし追ひしもの追はれしものもなべて果てにき

日比野 友子

紀三井寺競馬

競馬果てて崩るる群衆^{ぐんしゆ}に夕陽赤し勝ちし馬負けし馬いたはられつつ行く

別府觀海寺溫泉

夜着きて川は見えねど宿下のくらき林にこもる水の音
山下の松原を越えて海の上まで月押し照れり遠き波の音

共同墓地

丘の上は明るすぎたる夕映えに賑ふごとし群立つ墓石
おしなべて滅びし人のしづけさをここに思へり丘の上の墓地

湯河原溫泉

宿庭の丹塗の橋の濡るる見れば昨夜着きし時は雨の降り居し

長岡溫泉

湯の宿の大き玄關に婢一人寒々と居るに更けて着きたり
堀割を出でて展くる朝空に雪ま白なり富士は麓まで